

# 埼玉古墳群周辺遺跡の検討 I

中島利治 谷井 駒宮史朗  
若松良一 田中正夫

## 1 はじめに

埼玉古墳群は、8基の大型前方後円墳と1基の大型円墳を中心とした古墳群で、全国的にも一つの古墳群でこれほど大型の古墳の築かれた例が稀なことから、昭和13年に国の史跡に指定された。埼玉県教育委員会では、昭和42年から古墳群を中心にさきたま風土記の丘として整備を進めている。

以来、整備の過程で、稻荷山古墳をはじめとして発掘調査が実施されている。いずれの調査も断片的だが、徐々に古墳群の実態が解明されつつある。その成果は、埼玉古墳群発掘調査報告書として公表してきた。しかし、古墳群成立の背景を明らかにするには、古墳そのものの調査だけでなく、周辺の地理的環境、集落や周辺古墳群等の実体と共に検討してはじめて解明されるものであろう。

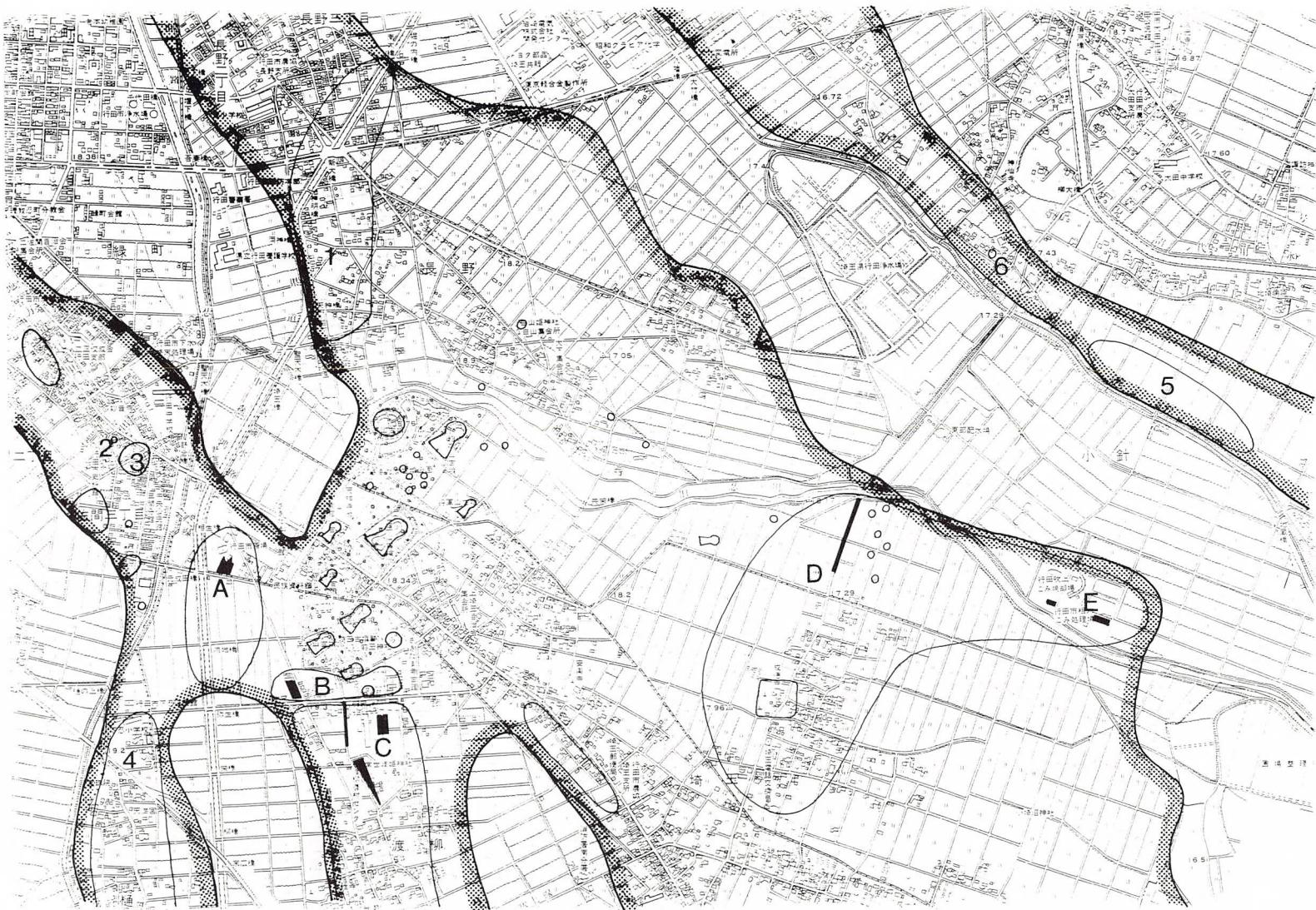
これら周辺遺跡については、開発とともに発掘調査が主とはいながら、行田市教育委員会等により精力的に取り組まれ、概報や報告書として刊行されている。また、多くの研究者により破壊に直面した遺跡から採集した遺物もかなり報告され、埼玉古墳群理解のための重要な資料となっている。

そこで、本稿では、埼玉古墳群周辺の歴史的背景を検討する一資料として、これら周辺遺跡の概要をまとめてみたものである。

まず、簡単に埼玉古墳群周辺の地形をみていく。この地域は県の北東部に位置し、東の地域は、関東造盆地運動による地盤の低下が最も著しい加須低地が広がる。また、荒川や利根川の乱流地帯でもあり、多くの自然堤防、砂丘が発達している。しかし、埼玉古墳群を乗せる地は、従来の発掘調査でも明らかのように、安定してローム台地が広がっていることが明らかになっている。埼玉の地の地理的位置から堆積作用が激しく、台地との差が明確でないためはっきりしないが、ローム台地の広がりは、およそ第1図のようになり、大宮台地最北端に当たる。そして東には旧荒川、西には旧利根川の流路がいく筋も走る。

埼玉古墳群を乗せる台地は、川里村広田地区から延びる台地で、周辺地域では幅も広く、中核となる台地である。埼玉古墳群の位置から北には、忍城本郭へ延びる支台、長野中学校遺跡を乗せる支台があり、古墳群は、ちょうど両支台の谷頭部に築かれたことになる。古墳群から北西には、陣場遺跡の乗る渡柳集落の支台、武良内遺跡の乗る堤根集落の支台が延びている。また、この台地から切り離された東側には、小見真觀寺古墳群や若小玉古墳群を乗せる北西から南東に細長く延びた支台がみられ、さらに、その東側には、真名板高山古墳の乗る利根川の旧河道であった会の川の自然堤防の一つといわれる高まりが延びている。

今回紹介する遺跡は、中心となる台地上の遺跡、特に埼玉古墳群にごく近い遺跡を取り上げた。外周の遺跡や埼玉から延びている支台上の遺跡は、次号以降、順次紹介していきたい。(谷井)



第1図 埼玉古墳群周辺遺跡  
（A 野合遺跡 B 陣場遺跡 C 原遺跡 D 愛宕遺跡 E 小針遺跡）  
1 神明遺跡 2 大日塚遺跡 3 No.41遺跡 4 鴻池・武良内遺跡  
5 小針北遺跡 6 小針鐘塚古墳

## (A) 野合遺跡 の あい

所 在 地 行田市大字渡柳字野合  
調査期間 昭和53年4月17日～5月22日

発掘主体者 行田市教育委員会  
発掘担当者 齊藤国夫

**遺跡の概要** 埼玉古墳群の台地から北西に延びた忍城本郭の支台や堤根の集落の支台の分岐点に当たる地の北よりに位置する。発掘調査は、行田市火葬場の建て替えに伴い、事前に実施されたものである。発掘調査区の中央に農道が走り、北側のB区は畠地、南側のA区は水田であった。A区はB区より1mほど低くなっている、かつて畠地であったが、相当削平して水田化したものである。

**遺構の概要** 発見された遺構は、狭い調査区にもかかわらずB区の残りがよく、奈良・平安時代の住居跡5軒、溝、ピット群がある。A区はわずかに掘り込みのみられた同時期の住居跡2軒、溝3本があったほか、住居跡の痕跡が2～3か所ほどあった。

A区の住居跡は、1号住居跡がわずかに掘り込みがあり、2.9m×3.2mの方形プランで確認されたが、2号住居は焼土と床面の状態から推定されたものである。

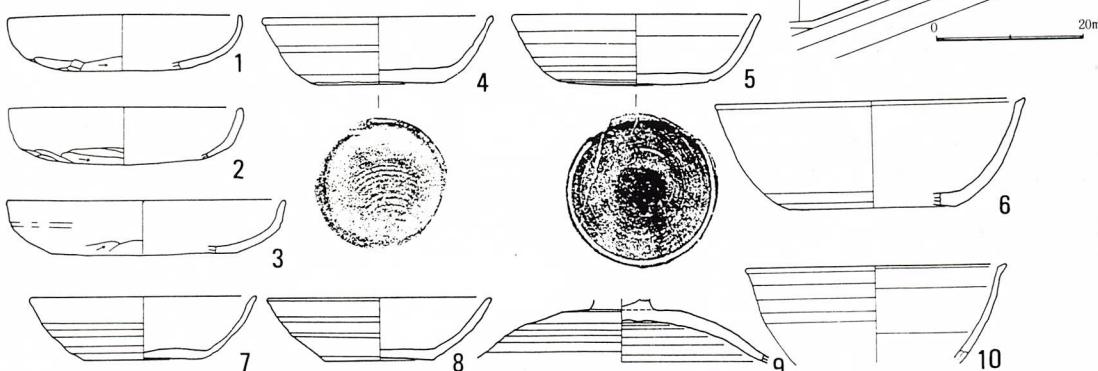
B区は平安時代の須恵器が出土した直角に曲がる溝のほか、5軒の住居跡のうち、3号住居跡が半分しか調査していないが、奈良時代後半のまとまった遺物が出土した。掘り込みは10cmほどあり、一辺4mほどである。

**遺物の概要** 発見された遺物は、すべて8世紀後半から9世紀代である。まとまった遺物のある3号住居跡は、土師器では南武藏形の甕、口縁が丸底、平底の杯、須恵器では、底部周辺のヘラ削りされた杯や碗がある。1号住居跡がほぼ同時期、4号住居跡は底部無調整の杯が出土しており、9世紀中頃と思われる。なお、図示しなかったが、M-4の溝からは高台付き杯が出土しており、10世紀前後の年代が考えられる。

(谷井)

### 参考文献

齊藤国夫1979「野合遺跡・原第II遺跡発掘調査報告書」  
行田市文化財調査報告書第5集



第2図 野合遺跡遺構・遺物実測図

## (B) 陣場遺跡

所在 地 埼玉県行田市大字渡柳

調査主体 埼玉県教育委員会

調査期間 昭和43年3月

遺跡の概要 陣場遺跡はこれまでに3回の調査が行われている。第1回は昭和33年12月に早稲田大学考古学研究室の滝口宏、玉口時雄による学術調査で、溝が検出されている。第2回目は昭和43年3月に、埼玉県教育委員会によって、さきたま風土記の丘建設に伴い復原する古代住居跡を得るための調査である。そして第3回目は昭和56年6月に、行田市教育委員会により個人住宅の建設に伴う調査が行われた。

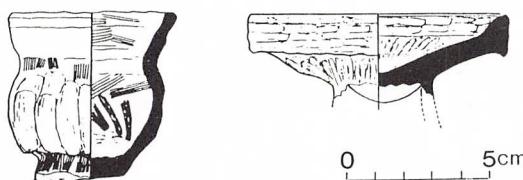
第3次調査では明確な遺構は検出されず、土師器と須恵器の小破片が採取されたのみである。遺構が検出されたのは第2次調査によってである。

遺跡は埼玉古墳群の北に位置し、第2回目の調査地点は中の山古墳から約200m程離れた、水田との比高差が約2m程の、水田を望む微高地の先端にある。この付近は各所で土取りにより水田化されたところが多く、遺跡も北と西側が大きく削られて破壊を受けていた。

調査面積は26m×12mの約300m<sup>2</sup>で、この範囲から方形周溝墓2基、鬼高窓の住居跡1軒、平安時代の住居跡1軒が検出された。

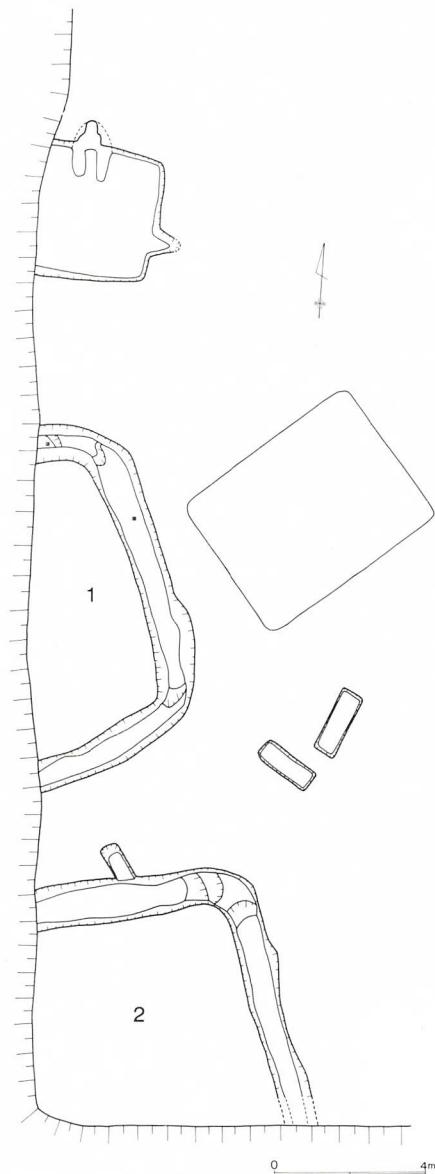
遺構の概要 方形周溝墓は溝の方向を同じくして並列し、1号周溝墓は西溝、2号周溝墓は西と南の周溝が土取りにより失われている。

1号周溝墓の溝は、わずかに外側にふくらみを見せ、コーナーは丸味を持つ。残された東溝の長さから一辺約8m前後の隔丸を呈する周溝墓とな



第3図

陣場遺跡方形周溝墓出土土器及び遺構実測図





陣場遺跡出土土器

ろう。北のコーナー付近の溝中から小型手づくね様の甕と器台が出土している。

2号周溝墓は、ほぼ直線的な溝がめぐり、コーナーの一部は浅くブリッジ状となる。出土遺物は検出されていない。

鬼高期の住居跡は一辺6m×5mの長方形プランとなる住居跡である。土師器の杯と甕が出土している。

平安時代の住居跡は、全体の約1/3が失われている。カマドが2か所あり、作り替えが行われたものと思われる。出土遺物は須恵器杯及び砥石がある。

**出土遺物** 方形周溝墓出土の土器は2個体のみである。器台は脚部を欠くが、両土器とも五領式の土器の範疇でとらえられるものである。また、鬼高式土器は、中でも新しい時期のものである。平安期の須恵器杯は回転糸切り技法による底部切り離しである。

### ま と め

今までのところ、さきたま古墳群の周辺での方形周溝墓の調査は、当遺跡例のみであり、今後はこれに伴う集落の発見が待たれる。また、鬼高期の住居は、墓域と集落の関係を示す好例として貴重な遺跡である。  
(駒宮)

### 参考文献

1973 「埼玉県埋蔵文化財調査報告書第2集」 埼玉県教育委員会

栗原文蔵 1969 「行田市陣場遺跡」 埼玉考古第7号 埼玉考古学会

行田市文化財調査報告書第13集 行田市教育委員会

斉藤国夫ほか 1982 「さきたま古墳群発掘調査報告書」

## (C) 原遺跡

所 在 地	行田市大字渡柳字原	主体者	第1次調査	埼玉県遺跡調査会
調査期間	第1次 昭和52年2月15日～3月20日		第2,3次調査	行田市教育委員会
	第2次 昭和53年6月21日～7月7日	担当者	第1次調査	栗原文蔵・金子真土
	第3次 昭和58年11月22日～12月10日		第2,3次調査	斎藤国夫

遺跡の概要 埼玉古墳群の南端にある中の山古墳の南の台地上に広がる。3次の発掘調査が実施されている。発見された遺構は、いずれも奈良・平安時代の住居跡が中心である。遺跡は、さらに東側に延びるが、調査地点西側は、約200mで谷となる。陣場遺跡が北に接して広がる。

遺構の概要 第1次調査では、平安時代の住居跡2軒、大溝1条、土壙36基、井戸1基が調査された。1号住居跡は、3.6×2.5mの長方形で、北壁にカマドがある。2号住居跡は、3.5×2.9mの胴張りの方形で、東壁北寄りにカマドがあった。床面には四つのピットがあった。

大溝は、幅5.8m、深さ1.5mで、底に砂の堆積があり、水流があったとされる。

第2次調査では、古墳の周堀1、平安時代の住居跡2軒、土壙1基が調査された。常世岐姫神社の乗る高まりは、周囲に幅約3.8m、深さ0.5mほどの堀が円形にめぐり、外径約28mの円墳と推定された。

1号住居跡は、2.3×2.8mの台形で、東側にカマドがあった。2号住居跡は、部分的な調査で、短辺3.6m、長辺4.1m以上である。北壁にカマドがある。この他、古墳時代の土壙が1基ある。

第3次調査では、奈良・平安時代の住居跡12軒、土壙12基、井戸1基、大溝1条が検出された。道路拡張調査のため、全体のわかるものはなかったが、カマドを東壁に設けるものと、北壁に設けるものがあった。大溝は、第1次調査で検出された溝と同一で、130m以上続くことがわかった。

遺物の概要 第1次調査の2軒の住居跡では、底部が糸切りのままの須恵器杯が出土しており、9世紀中葉以降と推定された。一方、大溝からは、特殊な器形の須恵器小形壺G(16)が出土した。伴出土器には底部糸切りのままの杯や高台付き杯(11～15)が出土している。畿内の壺Gは、8世紀末を限界とするが、本例の伴出土器は、9世紀中頃といわれ、今後検討を要しよう。

2次調査では、1号住居跡から砥石と高台付き杯が出土し、2号住居跡からは高台付き杯と杯及び鉢が出土している。杯は、糸切りのままのものと、底部周辺を持ちヘラ削りのもの、回転ヘラ削りするものがある。鉢は、底部全面がヘラ削りされていた。これらの特徴から9世紀中頃前後と考えられる。土壙からは、須恵器杯蓋(1)、壺、甌(2)、高杯の破片が出土した。杯蓋は陶邑のII期後半に比定され、6世紀後半と推定される。

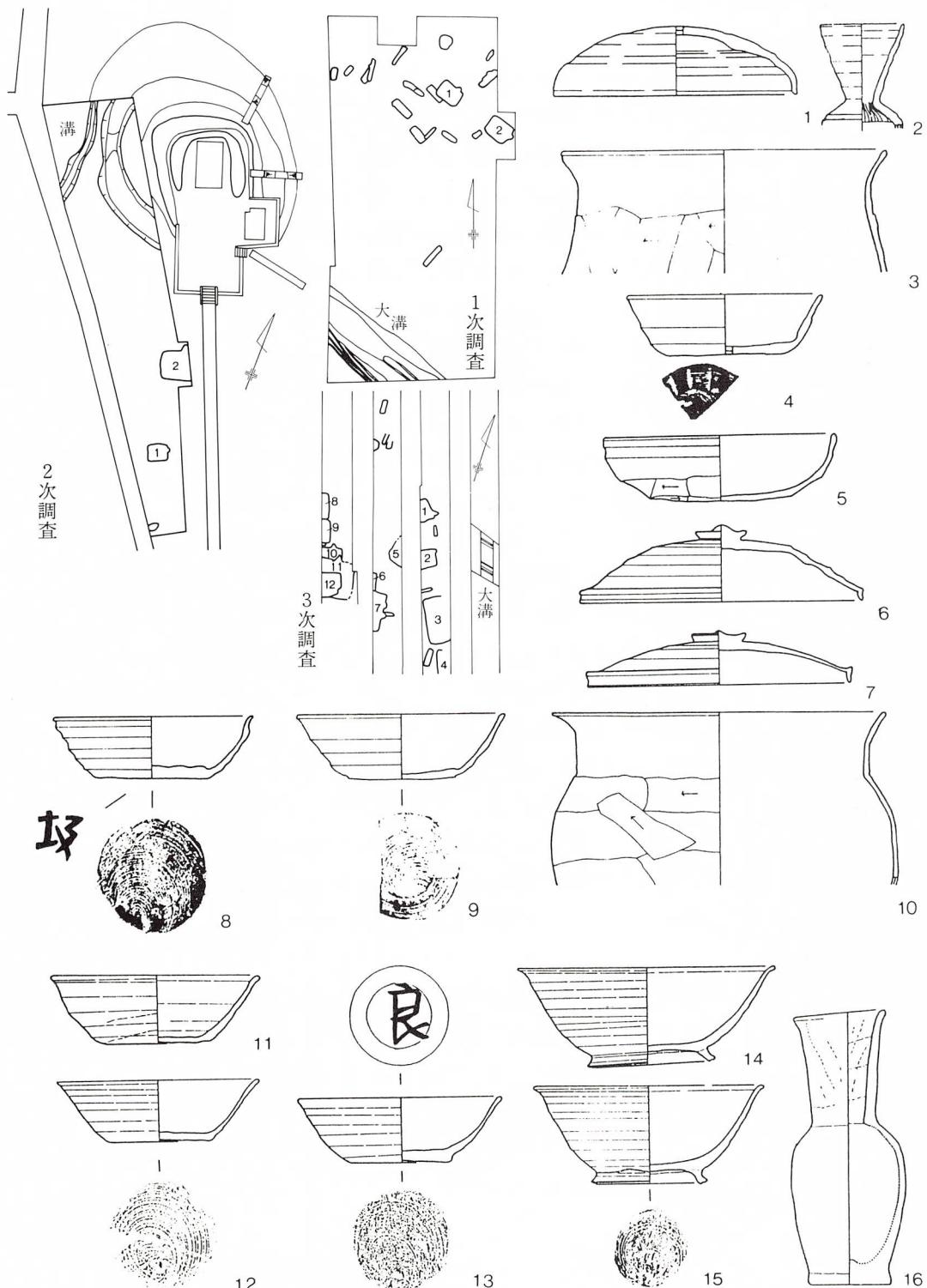
3次調査では、各住居跡から土師器甕、台付甕、須恵器杯、蓋、高台付き皿、紡錘車が出土した。底部の調整から9世紀前半と考えられる。  
(若松)

### 参考文献

栗原文蔵・金子真土 1978 「原遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第34集

斎藤国夫 1979 「野合遺跡・原第II遺跡発掘調査報告書」行田市文化財調査報告書第5集

斎藤国夫 1984 「原遺跡発掘調査報告書－第3次調査－」行田市文化財調査報告書第16集



第4図 原遺跡遺構・遺物実測図

1~2 2次D-1土壠、3・4 3次10号住居跡、5~10 3次11号住居跡  
11~16 1次大溝（遺構の縮尺は不定、遺物は約 $\frac{1}{4}$ ）

あたごどうり  
(D) 愛宕通遺跡

所 在 地 行田市大字埼玉字愛宕通1861番地他 発掘主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
発掘年月日 昭和58年4月6日～10月31日 発掘担当者 利根川章彦・西井幸雄

遺跡の概要 愛宕通遺跡は、行田市長野から南東へ続く低台地が、埼玉古墳群の周辺から東方に大きく広がった部分、約1kmの台地北端部に位置する。遺跡は、現在水田下に埋没した形となっている。発掘調査は、県道上新郷・埼玉線の拡幅工事に伴うもので、工事実施前に行われた。調査区は、現道の両脇に設定し、東西の幅約12m、現道に沿って南北約330mである。標高は南端で16.5m、北端で15.0mを測り、北へ向かって緩やかに傾斜している。また、調査区の北からおよそ3分の1にあたる部分に、浅い小さな谷が入り込んでいたと推定されている。

遺構の概要 検出された遺構は、古墳跡3基、平安時代の住居跡25軒、埋甕1基、溝状遺構5条、土壙50基余りであった。また、この他に五領期の遺物包含層が一部に認められた。

古墳跡は、調査区の北端に3基並んで位置するが、いずれも周溝の3分の1程度を確認したにとどまる。1号・2号古墳跡は周溝内径約10m、3号古墳跡は約12mの小円墳と推定されている。

平安時代の住居跡は25軒確認された。1号住居跡を除いて、すべて浅い谷の南側に位置し、住居跡どうしの切り合いは、調査区内では認められなかった。プランは方形であるが、東西にやや長いものが目立つ。また、住居跡には、壁溝を巡らすものが多い。カマドは北カマドと東カマドに大別される。住居跡の他に平安時代の埋甕があり、合わせ口の火葬墓と考えられている。溝状遺構と土壙については、時期・性格ともに不明なものが多いが、1号・4号溝状遺構が平安時代のものと考えられ、また土壙には、井戸跡と推定されるものが数基含まれている。

遺物の概要 第1号古墳跡周溝内から鬼高期の土師器杯と椀が、第2号古墳跡周溝内から須恵器大甕が出土している。1号古墳跡から出土した土師器の模倣杯は、埼玉古墳群小円墳出土土器に類例を求めることができる。2号古墳跡の須恵器大甕は、コの字状に外反する口縁をもち、頸部外面をていねいに撫でるなど6世紀前半頃のものと考えられている。また愛宕通遺跡では、住居跡や溝・土壙の覆土から埴輪片が出土しているが、検出された古墳跡に伴うものかどうか不明である。

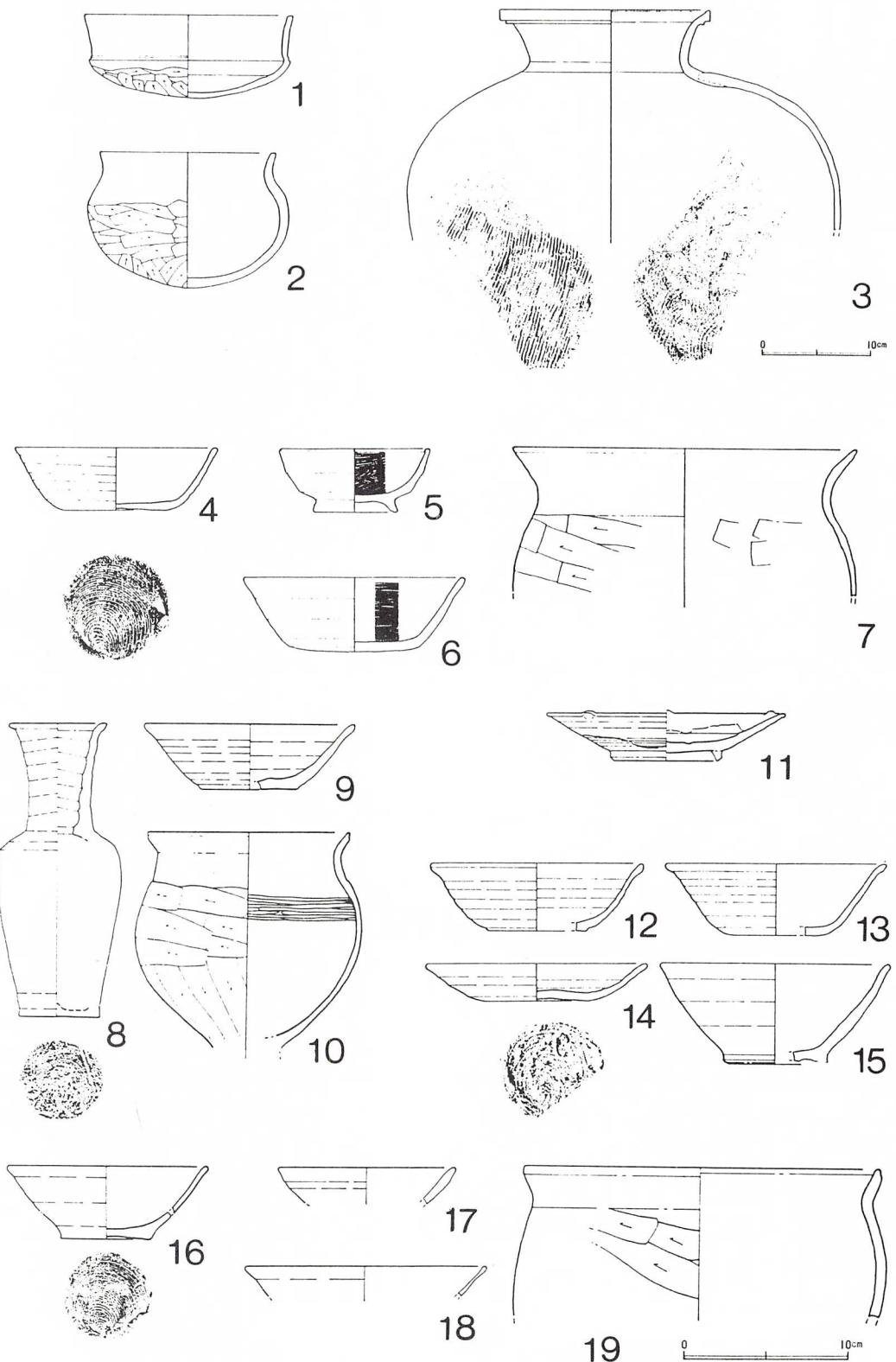
平安時代の遺物としては、須恵器杯・台付杯・蓋・土師器杯・甕・台付甕等があるほか、13号住居跡から須恵器長頸瓶、15号住居跡から灰釉陶器段皿が出土している。また、1号住居跡と13号住居跡のカマドの袖には平瓦が使用されており、2号住居跡からは、完形に近い丸瓦が出土している。この他、各住居跡覆土から瓦片が出土している。遺跡の南方約700mにある旧盛徳寺との関係が注目される。なお、14号住居跡のカマドでは羽口が支脚として用いられていた。平安時代の住居跡は出土した、杯・甕から6時期に分けられ、9世紀前半から、10世紀中葉までの間に比定されている。古墳時代前期のものとしては58号・59号土壙と包含層中から五領期のS字状口縁の台付甕・高杯・壠・有段口縁の壺などがある。

(田中)

参考文献

瀧瀬芳之 1985 『愛宕通遺跡』 県道上新郷埼玉線関係埋蔵文化財発掘調査報告 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 51集





第6図 愛宕通り遺跡出土土器（3のみ%）

1～2 1号古墳跡出土遺物  
8～10 13号住居跡出土遺物  
16～19 18号住居跡出土遺物

3 2号古墳跡出土遺物  
11 15号住居跡出土遺物

4～7 1号住居跡出土遺物  
12～15 10号住居跡出土遺物

## (E) 小針遺跡

所在 地	行田市大字小針字野通り	発掘主体者	行田市教育委員会
調査期間	A地区 昭和51年2月18日～3月7日	発掘担当者	A地区 中島利治
	B地区 昭和54年5月8日～6月24日		B地区 斎藤国夫

**遺跡の概要** 小針遺跡は、埼玉古墳群南東2kmの旧忍川を望む台地辺にある。かつて、小針下沼と呼ばれ、昭和初期に干拓が行われるまでは、湿地帯であった。昭和49年、古代蓮の種子採集の際、地表下約1mから古墳時代の住居跡が発見された。その後、ゴミ処理場建設に伴い二度にわたり発掘調査が行われた。第1次調査（A地区96m<sup>2</sup>）は住居跡7軒、溝3条、第2次調査（B地区 675m<sup>2</sup>）は、住居跡24軒、土壙3基が発見された。遺構は、すべて古墳時代から平安時代に築かれたものである。

**遺跡の概要** 検出された住居跡は、A地区で古墳時代前期2軒、後期1軒、奈良・平安時代2軒、B地区で古墳時代後期12軒、奈良・平安時代3軒が確認された。遺構の築かれた中心の時期は、6世紀で、20軒のうち12軒がこの時代である。遺構は、地表80～100mほど下の軟質ローム層を掘り込まれ、床面は黒色に変化したローム層となる場合が多い。また、遺構の覆土には、なん層もの粘土層が堆積していた。住居廃棄後まもなく利根川の支流の氾濫土が埋まったものと思われ、すでに、当時の水位がかなり高かったことを示している。住居形態は、重複が多くはっきりしないが、いずれも方形のプランで、カマドが北壁と東壁に設けられていた。

最も大型の住居跡は、A地区で発見された2号住居跡で、一辺が7.5m、B地区では6号住居跡が最も大きく、一辺6mほどであった。その他、覆土中には通常の住居跡と同様、焼土粒子や、炭化物を多量に含んだ土壙が3基検出されている。

**遺構の概要** 発見された遺物は、5世紀前半から9世紀代の土師器杯、甕、須恵器杯等である。A-6号住居跡からは、5世紀前半の「S」字状口縁の台付甕、器台、高杯が出土している。また、B-5、14、20号住居跡から出土した須恵器模倣杯は、埼玉古墳群内の梅塚古墳から出土した土師器の杯と類似しているものである。この杯は口縁部が直立したもので、14号住居跡の土師器杯に比べて、口縁部はわずかに短くなり、なかには若干外反するものもあり、深さもやや浅くなっている。この傾向がやや進んだものには、B-6・9号住居跡の杯があり、やや後出するものであろう。

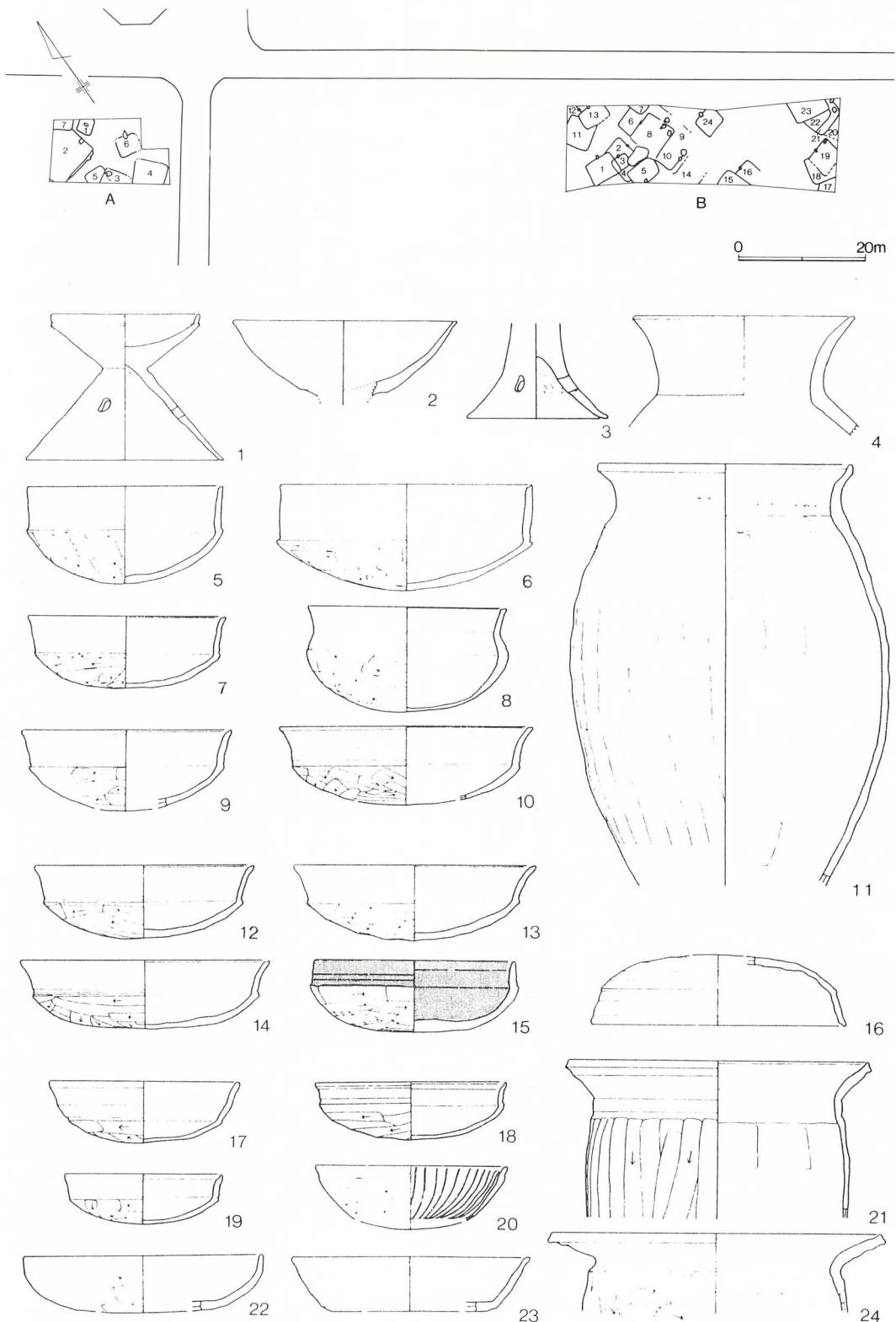
B-19号住居跡では、7世紀前後の、口縁部が内曲し、体部との間に鋭い稜のある杯が出土し、土壙1では、7世紀前半から中頃とされる外反する口縁部もつ小形化した杯が出土した。

また、B-24号住居跡では、8世紀中頃の底部が回転糸切り後、ヘラ削りされた口径が大きく、偏平な須恵器杯が出土した。B-23号住居跡は、底部が回転糸切りのままの須恵器杯がある。「私」「物」「久」などと線刻された紡錘車が出土している。

(中島)

### 参考文献

- 中島利治ほか 1976 「小針遺跡の調査」－A地区－行田市文化財調査報告書第3集  
斎藤国夫 1980 「小針遺跡発掘調査報告書」－B地区－行田市文化財調査報告書第10集



第7図 小針遺跡遺構・遺物実測図

1~4 A-6号住居跡、5~6 B-14号住居跡、7~11 B-9号住居跡  
12~16 B-6号住居跡、17~21 土壙、22~24 B-24号住居跡